

(明科町の埋蔵文化財第11集)

# ほうろく屋敷遺跡Ⅳ

—個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告—

2 0 0 1



(西から)



(東から)

明科町教育委員会

(明科町の埋蔵文化財第11集)

# ほうろく屋敷遺跡Ⅳ

—個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告—

2 0 0 1

明科町教育委員会

## 序

ほうろく屋敷遺跡は、昭和63年7月から翌平成元年12月にかけて、川西地区県営ほ場整備事業によって13,000㎡の発掘調査が行われ、縄文時代前期から後期の住居址66軒、同時代の多くの配石遺構や墓塚が検出され、なかでも弥生時代中期初頭の配石遺構を伴う再葬墓が16基も検出されたことは特筆されます。この他、弥生時代後期の住居址1軒、平安時代の住居址20軒、中近世の建物址2棟などが見つかっています。また、発見された遺物の量も膨大で、整理箱500箱を超える縄文時代中期を中心とした縄文土器、約3,000点もの打製石斧、凹石約2,000点、石鏃約1,100点をはじめ、多種多様の石器や土製品が出土し松本平を代表する大遺跡であることが判明しました。

このたび、第1次、第2次調査でもっとも多く、遺構、遺物が集中した地域にある松枝二三雄さん宅が建て替えられることになり、松枝さんのご好意で工事中工前に発掘調査をさせていただけることになり、平成12年5月10日より6月10日まで150㎡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、遺構としては縄文時代前期から後期の竪穴住居址14軒、遺物として整理箱50箱にも及ぶ大量の土器や石器類を得ることができました。また、少ない面積での調査であったため、ていねいな調査が可能であったことから、住居址の床面から非常に細かい黒曜石やチャートの屑を検出することができ、石器の加工工房であるとの推定が可能になり、第1次、2次調査で石器の多量に検出された理由が判明されたことは大きな成果でありました。

最後に、発掘調査にあたり快く発掘調査を了解していただき、調査にもご助力を賜りました松枝二三雄さんに心から感謝申し上げるとともに、調査員の先生方、調査にご理解とご協力をいただいた関係各位に深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

平成13年3月

明科町教育委員会

教育長 廣田 健郎

## 例 言

1. 本書は、個人住宅建替えに伴い、明科町教育委員会が実施した明科町大字南陸郷小泉所在のほうろく屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現場での発掘調査は平成12年5月から6月にかけて行い、経費については町が負担し、国庫及び県費補助金を受けた。
3. 調査は明科町教育委員会が主体となり調査団を組織し調査を実施した。
4. 本書作成における作業分担は次のとおりである。
  - ・遺構 測 量 大澤哲、今村克、唐沢政子、藤原誠子、細尾みよ子、矢花広子  
トレース 大澤、今村、山本紀之  
写 真 大澤、今村
  - ・遺物 洗浄、注記、復元  
唐沢、藤原、細尾、矢花  
実 測 大澤、今村、重田恭子、唐沢、藤原、細尾、矢花  
写 真 山本
  - ・編集 山本、大澤
5. 遺構の実測については、一部について写真実測を行い、㈱東京航業研究所へ依頼した。
6. 本書の執筆は山本が主として行い、大澤が補筆した。  
出土土器に関しては大町市文化財センターの島田哲男氏に執筆いただいた。
7. 本調査の出土品、諸記録は明科町教育委員会が一括保管している。
8. 発掘調査・報告書作成に当たり次の諸氏・諸機関にご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する次第である。  
桐原健、小林康男、島田哲男、直井雅尚、原明芳、樋口昇一、平林彰、山田真一、山下泰永、

## 第1章 調査状況

### 1. ほうろく屋敷遺跡について（第1図・第2図）

ほうろく屋敷遺跡は長野県東筑摩郡明科町大字南陸郷小泉にあり、犀川左岸河岸段丘上の標高515mから510mの北向き緩やかな斜面上約20,000㎡にわたって広がる遺跡で、縄文時代早期末から後期中葉、弥生時代中期初頭から後期、平安時代、中世、近世にわたる遺跡として知られている。昭和63年(1988)7月から平成元年(1989)3月までと平成元年8月から同年12月までの2期において、県営圃場整備事業に伴い約13,000㎡とほぼ全面に近い面積の調査が実施されている。この時の調査では縄文時代68軒、弥生時代後期1軒、平安時代20軒の竪穴住居址や、掘立建物址3棟を検出している。

また、遺物では、3ヶ所の土器捨て場のような土器集中区を中心に縄文時代早期末から後期にかけての土器片が整理箱500箱あまりも出土し、復元された土器は300個体以上に達した。その他、土偶やミニチュア土器、土笛、動物形土製品など多様な土製品も多数出土している。石器については特に原石や剥片が多量に出土する特徴が顕著に見られ、完成品の数も1遺跡の出土数としては極めて多く、打製石斧3,000、磨石と凹石2,000、石鏃1,100、スクレイパー600、磨製石斧180、石匙103、横刃石器350、石棒35、石皿114、砥石43、石錐149を数えた。このように遺物の出土傾向の特徴や出土量の豊富さから、ほうろく屋敷遺跡は石器の製作集落址としての役割を担い脈々と経営されていたのではないかと推定されている。

さらに注目すべきは今回の調査区の西側一帯の5,000㎡であり、ここからはほぼ全面に縄文時代中期から弥生時代中期初頭の集石や配石が見られ、もっとも上面の配石遺構の下から弥生時代中期初頭の再葬墓4群16基、それに伴う土器30個体あまりが発見されており、当時の葬法を解明する上で貴重な資料を提供している。

今回の調査区は個人住宅建設工事に伴い設定されたもので、いままで調査区域外とされていた私有地内であるため遺構の存在が推定されたことから、土地所有者であり施工主の松枝二三雄氏と明科町教育委員会との間で事前保護協議を行った結果、工事前に発掘調査を実施する事で合意が得られた。明科町教育委員会は調査団を編成し、平成12年5月10日から同6月10日までの期間で発掘調査を行い、その後明科町歴史民俗資料館に於いて報告書作成に向けた整理作業を行い現在も進行中である。

### 2. 調査体制

調査団長 熊井 秀夫 ～12.9まで（明科町教育委員会教育長）

廣田 健郎 12.10～（明科町教育委員会教育長）

調査主任 大澤 哲（明科町教育委員会生涯学習係長）

調査員 関 全寿（町文化財調査委員）

今村 克（長野県考古学会会員）

山本 紀之

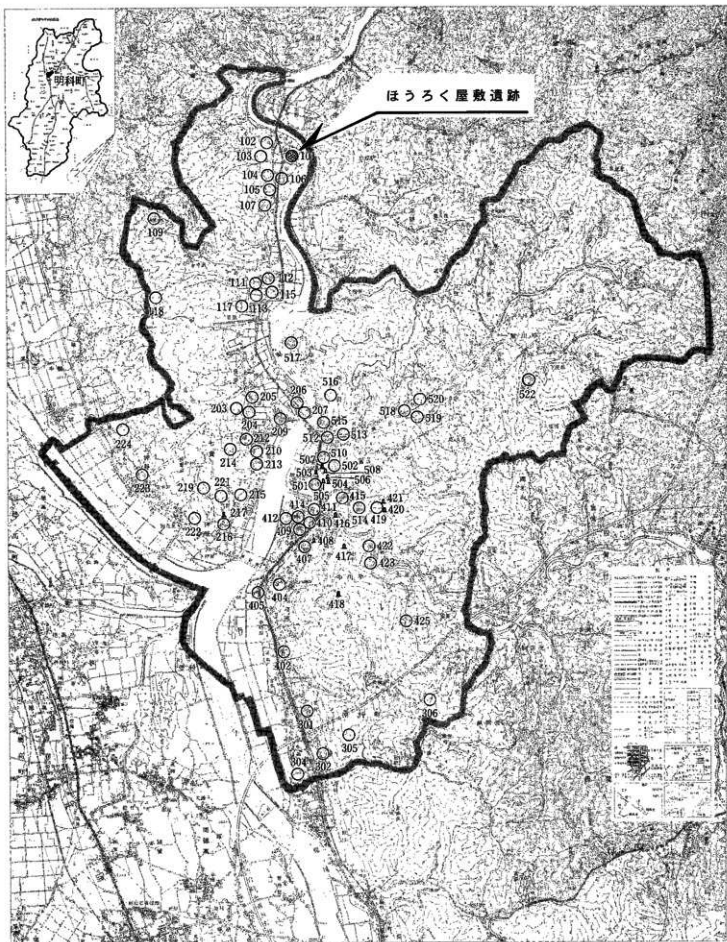
調査補助員 唐沢 政子、藤原 誠子、細尾みよ子、矢花 広子

調査参加者 飯田 三男、金子 宏、小林 幹司、小林 善樹、山崎 照友

事務局 明科町教育委員会 生涯学習課

課長 山崎 正博、生涯学習係長 大澤 哲、主査 横山 友明

通称 番付	通称名	所在地	立地	旧石 群	縄文	弥生	古墳	中世	近世	通称 番付	通称名	所在地	立地	旧石 群	縄文	弥生	古墳	中世	近世	古墳								
				早 中 後	早 中 後	早 中 後	早 中 後	早 中 後	早 中 後					早 中 後	早 中 後	早 中 後	早 中 後	早 中 後	早 中 後	早 中 後								
101	ほうろく 屋敷	南陽舞小泉	岸川段丘		○	○	○	○	○	404	上中森塚	中川町野跡	岸川段丘		○	○	○				○	○	○					
102	高岩寺跡	〃	岸川段丘						○	405	町産塚	〃	岸川段丘										○					
103	萬草	〃	岸川段丘		打製石斧					407	明科遺跡跡 上塚	〃	上手上塚	岸川段丘		○							○	○				
104	竹塚	〃	岸川段丘		打製石斧、磨製石斧				○	408	上手上塚 上上塚	〃	山麓											○				
105	上ノ段	〃	岸川段丘					○		409	明科遺跡寺	〃	奥町	岸川段丘										○	○			
106	北塚	〃	岸川段丘		打製石斧、石匙				○	410	奥町	〃	岸川段丘											○	○			
107	橋平	〃	岸川段丘					○		411	奥町	〃	奥町	岸川段丘											○	○		
108	茶臼寺	〃	金井沢	山麓					○	412	龍岡館	〃	本町	岸川段丘											○	○		
111	寺光寺跡	〃	中村	岸川段丘					○	414	笠塚	〃	岸川段丘												○	○	○	
112	寺裏	〃	岸川段丘		打製石斧					415	こや塚	〃	東栄町	会田川 河岸段丘		○	○	○							○	○	○	
113	石塚	〃	岸川段丘			○			○	416	龍志寺 1号墳	〃	山麓													○		
115	中村庭園	〃	岸川段丘			○				417	2号墳	〃	山頂													○		
117	藤原平	〃	岸川段丘		縄文土器					418	3号墳	〃	町跡地	山麓の 平塚地													○	
118	塚山	〃	山頂		打製石斧					419	武土塚	〃	大足	会田川 河岸段丘												○	○	○
203	宮塚	七貴 萩原	山麓			○			○	420	武土平 1号古墳	〃	会田川 河岸段丘														○	
204	宮原古塚跡	〃	山麓						○	421	2号古墳	〃	会田川 河岸段丘														○	
205	宮ノ前	〃	岸川段丘			○			○	422	社字	〃	大足社中	山麓	?	○	○											
206	荒井	〃	岸川段丘						○	432	城下	〃	山麓														○	
207	伊勢宮	〃	岸川段丘			○			○	425	光久寺	〃	清水	山麓													○	
209	みどりヶ丘	〃	岸川段丘		○	○	○	○	○	503	藤原平 藤原之爪	東川手瀬	岸川段丘														○	
210	堀川原	〃	堀川原	岸川段丘		○	○	○	○	502	新倉	〃	岸川段丘														○	
212	板取古墓跡	〃	山麓						○	503	金山塚古墳 1号墳	〃	岸川段丘														○	
213	浜五郎墓跡	〃	岸川段丘			○				504	2号墳	〃	岸川段丘														○	
215	上野	〃	下野野	岸川段丘					○	505	3号墳	〃	岸川段丘														○	
216	やしき	〃	岸川段丘			○			○	506	4号墳	〃	岸川段丘														○	
217	上塚古墳	〃	岸川段丘						○	507	5号墳	〃	岸川段丘														○	
219	野野山遺跡跡 野野山	〃	山麓			○			○	508	お藤塚古墳	〃	岸川段丘														○	
221	遠ヶ丘	〃	山麓						○	510	藤田	〃	岸川段丘														○	
222	野野八橋宮	〃	高瀬川 河岸段丘						○	512	塩田宮宮	〃	岸川段丘			○	○										○	
223	中末戸	〃	上野野	山麓					○	513	三五山	〃	棚沢川 河岸段丘			○	○											
224	天主塚	〃	高瀬川 河岸段丘						○	514	茶白山	〃	山麓														○	
301	光遺跡跡 北村	光 北村	岸川段丘		○	○	○	○	○	515	木戸跡ノ爪	〃	水戸 自然堤防														○	
302	中森	〃	中森	岸川段丘					○	516	大久保	〃	大久保	山麓													○	
304	古宮	〃	岸川段丘						○	517	上生野	〃	上生野	岸川段丘													○	
305	しょうぶ平	〃	山麓の 平塚地						○	519	山中中塚	〃	山中	昔倉の 平地													○	
306	天草	〃	矢ノ沢	山麓の 平塚地	石塚、スレイバー				○	520	土橋	〃	山中	山麓													○	
402	陣宮社	〃	中川平宮本	岸川段丘					○	522	庄跡	〃	庄跡	山麓													○	



第1図 明科町遺跡分布図

### 3. 調査方法 (第3図)

住宅建設予定地150m<sup>2</sup>を今回の調査区とし、これに有限会社サン・コンサルタンツに委託して国土座標による測量座標杭を設定した。この測量杭を基準に5m×5mのグリットを区画し、西から順にA区、B区、C区、D区、E区、北から順に1区、2区、3区、4区、5区とした。さらに各グリットをそれぞれ4分割(①、②、③、④)して遺物の取り上げに際しての配慮を行った。

調査地区内を一部試掘して土層観察後、表土を重機により除去してから手作業で調査を進めた。測量図面は20分の1の縮尺を基本とし、現場ではグリットごとに分割して平面図を作成し図面整理の段階で付け合わせを行った。尚、必要と思われた際には適宜10分の1の図も作成している。株式会社東京航業研究所に委託して調査区全体の写真測量を実施した。

写真撮影は大澤が行い、撮影にあたっては脚立、高所作業車などの機材を使用した。

### 4. 遺構・遺物の時期 (第4～7図)

地層は20cmあまりの表土の直下に黒色土が20～30cm堆積して縄文時代中期後半から後期の遺物包含層となっており、その下の黒褐色土層(厚さ30～40cm)上面が縄文時代中期後半の遺構面と考えられた。この黒褐色土層内に縄文時代中期前半の包含層と遺構面が存在すると推定された。その下層には有機物が混入して堆積した砂層で、この砂層上面がおそらく縄文時代中期初頭の遺構面となり、砂層内が縄文時代前期の包含層になるのではないかと考えられた。

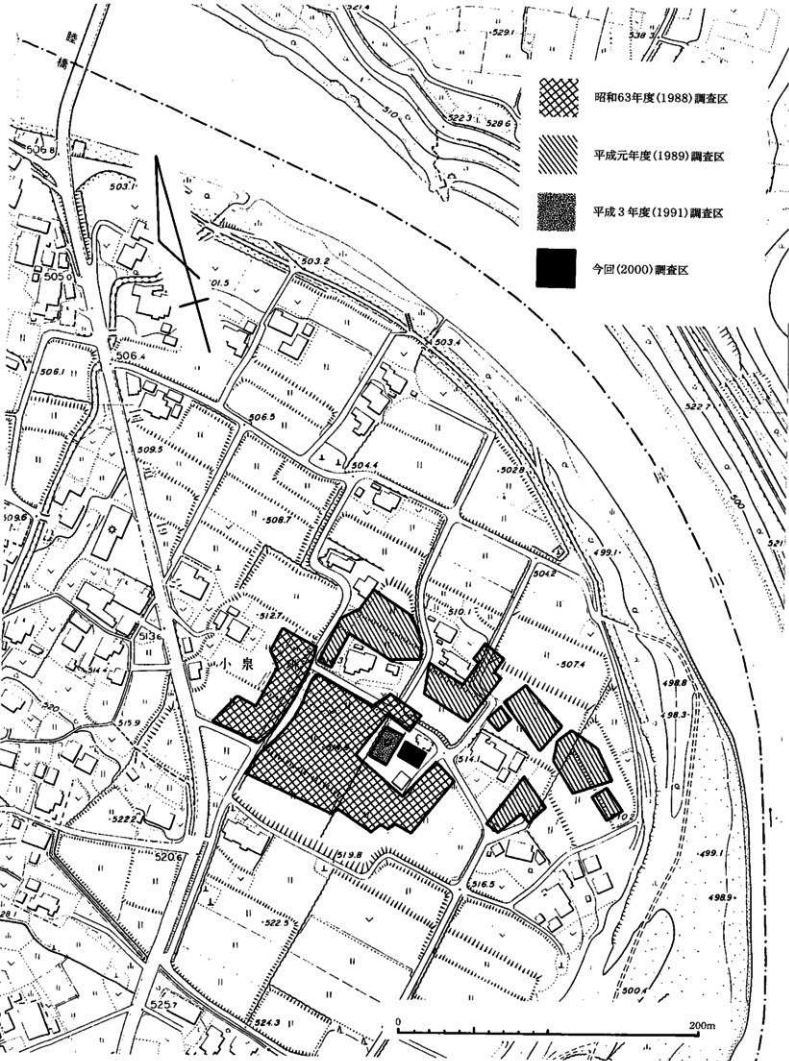
今回の調査では推定で14軒の竪穴住居を確認することが出来たものの、全体にさらさらの砂質土層で遺構の検出にはきわめて困難が伴い、住居の壁の掘り込みや柱穴はほとんど検出できなかったため、すべて炉の検出あるいは遺物の出土状態からのみで住居と判断せざるをえない状況であった。そのため重複などの遺構どうしの関係がはっきりしない部分もあり、遺構の年代推定にあたっては、土層の観察結果と推定床面上から出土した土器などによって総合的に検討を行い、各遺構は縄文時代中期初頭から後期初頭の範囲内に含まれると推定された。

### 5. 遺跡の特徴

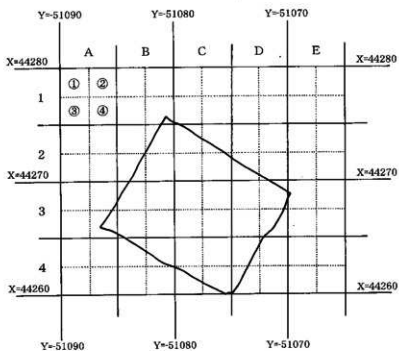
今回の調査では住居の推定床面上からはどの時期の住居も例外なく黒曜石やチャートの剥片あるいは細かな削り屑がたぐさ見つかり、製作途中の未製品石器や原石も多数出土していることから、ほろく屋敷遺跡集落が、石器製作集落としての役割を担って存続していたのではないかと考えられる。こう考えると、前回までの調査で出土した1遺跡としては極めて多量で多様な石器類も石器製作集落としての遺跡の特徴に反するものではないと思われる。

このほろく屋敷遺跡は直下に犀川が流れ、石器の原料となるいろいろな種類の石材に事欠かず、さらに砥石の原料である砂岩も遺跡西方の中山山地の沢筋で容易に入手できるなど、石器製作の上できわめて好条件に恵まれていたものと思われる。また、出土する土器の文様で長野県内はもとより北陸系あるいは東北系の土器文化の文様構成の影響を受けているものが多数みられることから、犀川を通じた交流(人と物)も盛んに行われていたと考えられ、この水運交流により黒曜石や滑石、ヒスイ、蛇紋岩などの特殊な石器原料の原石も入手できたものと思われる。現在まだ今回の整理作業が完全に終了していないものの、いままで得られた調査資料とあわせた資料全体の総合的再検討を行う必要性を感じている。

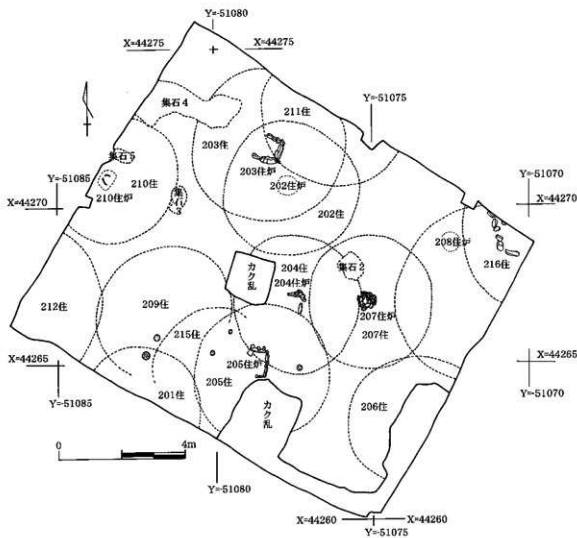




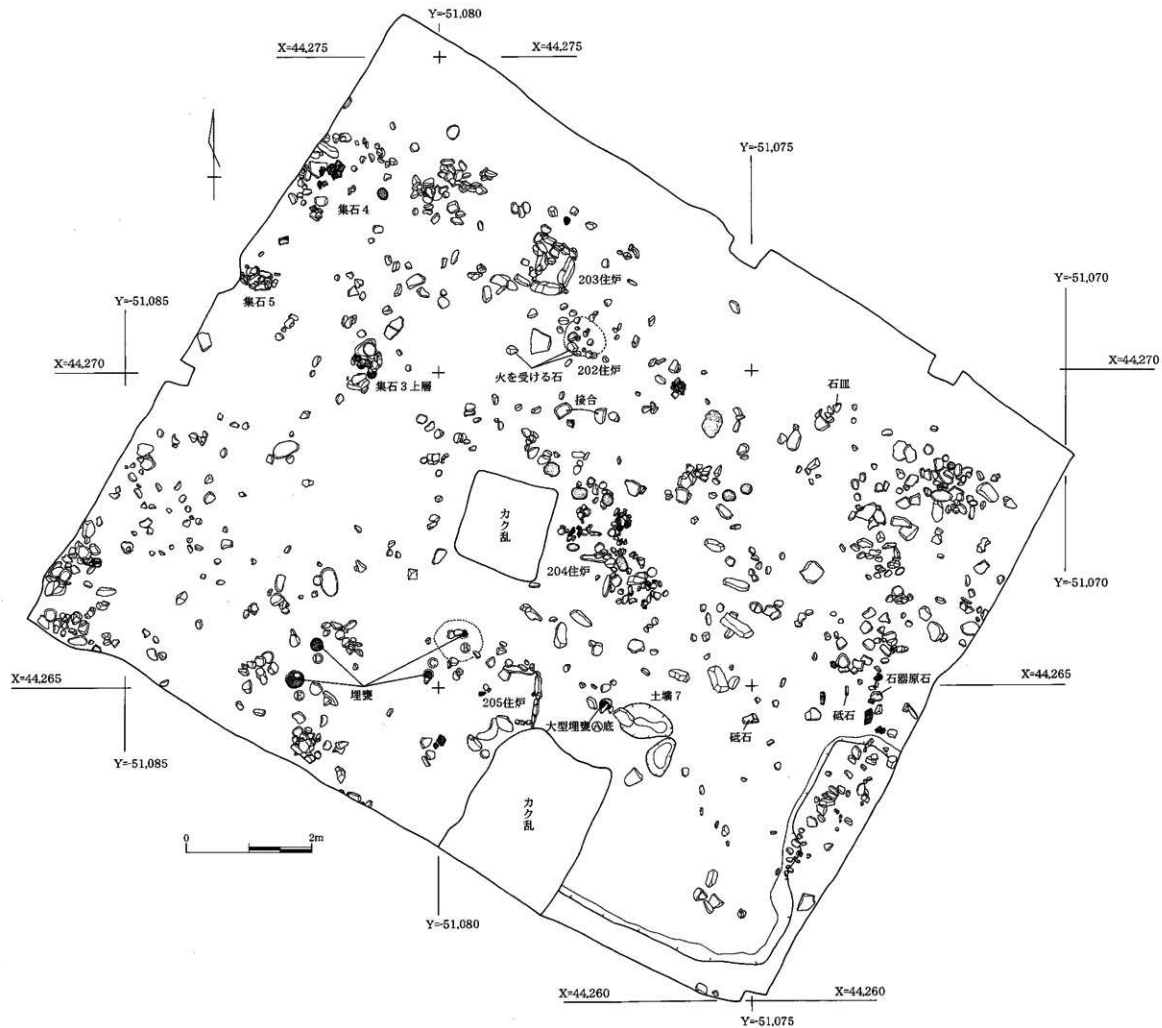
第2図 調査地区図 (1:2,500)



第3図 グリット設定図



第4図 調査区遺構分布



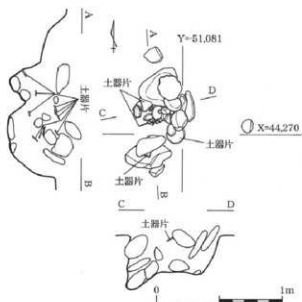
第5図 調査区全体図(上層)



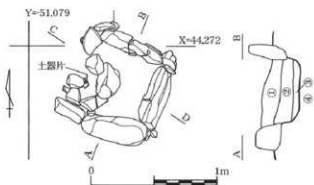


第6図 調査区全体図 (下層)

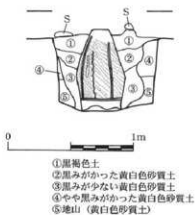




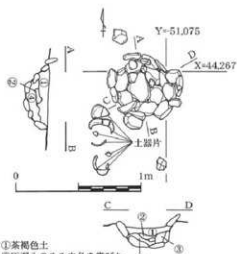
集石 3 上層集石



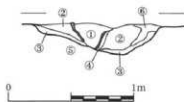
203住炉



大型埋壺△



207住炉



210住 (埋壺)



第7図 遺構図・土層図

## 第2章 遺物

### ほうろく屋敷遺跡4次調査出土の縄文時代中期土器について

ほうろく屋敷遺跡においては、前回の調査において、縄文時代中・後期を中心として早期末葉、前期中葉～末葉の土器が出土しており、特に中期においては、初頭～末葉まで全般にわたって出土している。今回の調査区においても同様な状況であったが、量的に多く、すべてを報告できないので、ここでは復元できるか、または推定復元できるものについて記す。

なお、この遺跡の出土中期土器群を見る限り、松本平に分布する土器群に加え、千曲川に合流する厚川流域、または松本平の中でも善光寺平に近い位置という地理的条件のためか、比較的東北信タイプの土器群が見られる傾向にある。

① 中期初頭（九兵衛尾根Ⅱ式期、梨久保式後半期）（5・11・15・19・20・23・28・36）

11・15・19・28は208住、23は209住（埋喪）、36は216住、5は集石の出土である。

半裁竹管による施文を主体とするもの（11・20・36）と縦に転がした結節を伴う縄文を地文とする土器の2種類に分けられる。

② 中期中葉（猪沢式期・新道式期）（2・3・6・16・18・24・26・27・29・34）

24は209住（埋喪）、2・18は212住内、3は212住上部集石上面、16・34は212住検出面、6・26は集石、27・29は包含層の出土である。

半裁竹管による角ばった結節状沈線文（押しき文（角押し文・三角押し文）、斜行沈線文を多用する土器群で、横に連続する指頭圧痕文があるものが半数見られる。総じて、東信・北信南部にひろがる所謂「後沖式」的様相が強く、どちらかという猪沢式期に属するものが多いと考えられる。6は樽形の深鉢で、口縁部に顔面表現は欠損しているが土偶状の胴体背部的表現となっており、人体文であったと思われる。34・37は同一個体では中农信地区に分布する平出遺跡3類Aタイプの土器である。24は北陸系の新崎式系の土器である。

③ 中期中葉（井戸尻Ⅰ式期）（1・7・8・9・31・35・39）

1は土壇11内、31は土壇内、8・9・39が集石、7・35が包含層の出土である。

すべて深鉢で、31の縄文主体のものを除くと沈線・隆帯・結節状沈線等で曲線を多用したモチーフで文様を描いている。7は半裁竹管と隆帯で曲線モチーフを描いた、焼町タイプの土器である。

④ 中期中葉（井戸尻Ⅲ式期）（10・14・22・38）

14・22は201住、38は208住（上層への混入かもしれない）、10は埋喪である。

10が浅鉢である以外は、ややひょうろく長くなった胴部に樽形モチーフの文様がつく中葉後半に多く見られる樽形土器の後半に値する土器群である。

⑤ 中期後葉（唐草文土器2段階、曾利Ⅱ式期）（13・17・25・32・33・40）

17が204住か205住の埋喪以外は、包含層の出土である。

縄文地文（13・17・40）のものと同条線・細条線地文（25・32・33）のもの2種類が見られる。

⑥ 中期後葉（唐草文土器3段階、曾利Ⅲ～Ⅳ式期）（4・30）

包含層出土のものである。綾杉文を地文とした樽形の土器である。

⑦ 中期後葉（唐草文土器4段階、曾利Ⅳ～Ⅴ式期）（12・21）

12は集石、21は包含層の出土である。両者とも深鉢で、太い綾杉状沈線を地文としている。





2



3



4



5



6

出土土器 (縮尺1/4)



7



8



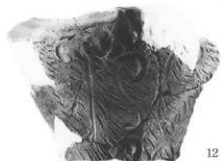
9



10



11



12



13(1/8)



14



15



16

出土土器（縮尺は明記してあるもの以外1/4）



17(1/8)



18



20



21



19



22

出土土器（縮尺は明記してあるもの以外1/4）



23



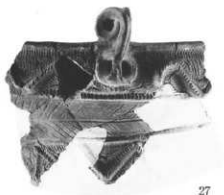
24



25



26



27



28

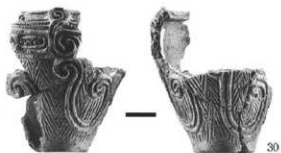


29

出土土器 (縮尺1/4)



31



30



34



32



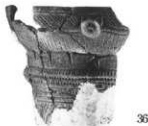
33



37



35



36



40



38

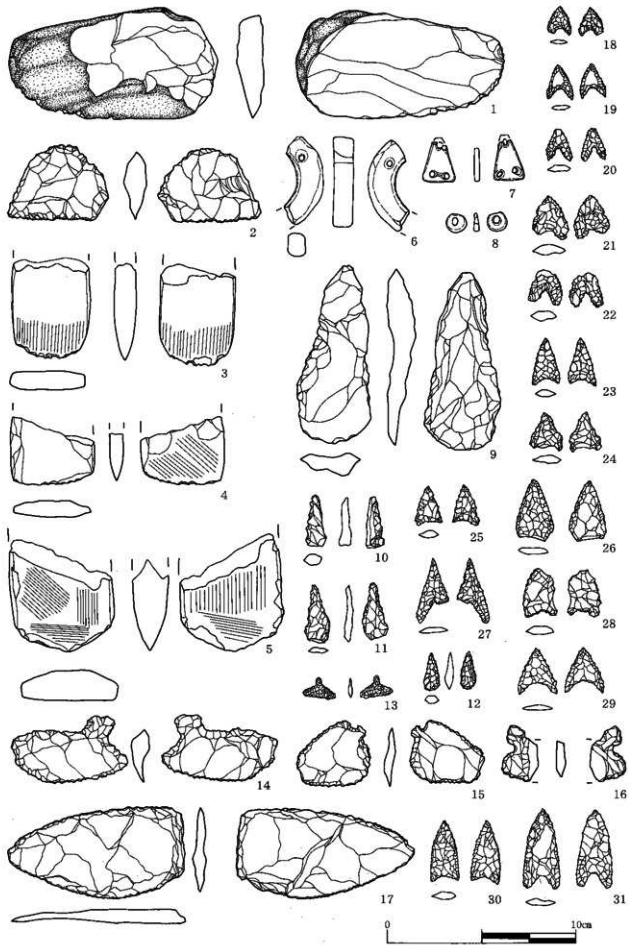


39

出土土器 (縮尺1/4)

石器図版表 長さ・幅は最長値、厚さは最厚値を表し、( ) は欠損がある場合の現存値を表す。

No.	形態	遺構	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	材質	色調	注記	備考
1	横刃	C-3-3	110	56	13	140.0	チャート	赤色	No.251C-3-3	
2	スクレイパー	C-2-4	53	39	12	25.8	チャート	黒灰色	No.444C-2-4	
3	磨製石斧	C-2-2	(52)	40	10	51.6	蛇紋岩	黒灰色	No.166C-2-2	
4	磨製石斧	C-3-2	(34)	44	12	24.2	蛇紋岩	黄茶色	No.102C-3-2	
5	磨製石斧	C-2-3	(52)	56	19	75.4	蛇紋岩	白緑色	No.10	
6	垂飾り	B-2-3	47	12	10	14.6	滑石	黄茶色	集石5No.371	縄文前期けつ状耳飾りの再利用
7	垂飾り	B-2-3	(20)	16	3	2.1	滑石	黒色	No.146B-2-3	
8	垂飾り	D-3-2	10	10	2	0.3	滑石	黄茶色	No.348D-3-2	
9	打製石斧	D-3-3	94	39	13	46.3	頁岩	灰黒色	No.111D-3-3	
10	石錘	C-2-3	27	10	5	1.2	黒曜石		No.125C-2-3	
11	石錘	B-4-1	30	12	4	1.4	チャート	灰色	No.418B-4-1	
12	石錘	C-4	20	8	4	0.6	黒曜石		No.545C-4	
13	石匙	216住	18	11	2	0.3	黒曜石		No.552	ミニ石匙
14	石匙	D-3-3	60	33	10	16.4	チャート	灰白色	No.155D-3-3	
15	石匙	C-4-2	39	34	4	6.9	チャート	灰白色	C-4-2	206住右側フク土中
16	石匙	216住	(20)	30	5	2.6	チャート	赤	No.553	
17	石包丁	B-4-1	93	47	5	31.6	粘板岩	灰白色	No.347B-4-1	
18	石鏃	土壌3	15	12	2	0.3	チャート	暗灰色	No.326	
19	石鏃	B-3-1	19	13	2	0.5	チャート	黒灰色	No.162B-3-1	
20	石鏃	土壌4	16	13	4	0.5	黒曜石		No.327B-3-2	
21	石鏃	C-4-1	23	19	5	1.6	黒曜石		No.433C-4-1	
22	石鏃	B-3-3	(20)	18	5	1.1	黒曜石		No.412B-3-3	
23	石鏃	C-4-2	25	15	4	1.1	チャート	白灰色	No.147C-4-2	
24	石鏃	D-3	20	18	5	1.3	チャート	黄灰白色	No.47	
25	石鏃	土壌3	20	15	4	1.0	チャート	肌色	No.328B-3-1	
26	石鏃	D-3-3	32	20	4	2.6	チャート	黒灰色	No.115D-3-3	
27	石鏃	B-3-2	35	16	3	1.3	チャート	白灰色	No.151B-3-2	
28	石鏃	C-2-3	26	17	4	1.8	黒曜石		No.432C-2-3	
29	石鏃	B-3-1	24	21	3	0.8	チャート	黒灰色	No.134B-3-1	
30	石鏃		32	15	4	2.1	チャート	灰白色		排土内
31	石鏃		40	20	3	2.8	チャート	灰色		排土内



第8圖 出土石器



調査区上層 (南東から)



調査区下層 (南東から)



203住居 (南西から)



212住居土器出土状態 (東から)



216住居集石 (南西から)



216住居土器出土状態 (西から)





203住居炉（西から）



204住居炉（西から）



205住居炉（南から）



208住居炉（南から）



207住居炉（南から）



207住居炉完掘（南から）



集石3上層集石（東から）



集石3下層（東から）



土壙11断面（東から）



土壙11土器出土状態（西から）



土壙11完掘（西から）



212住居骨片出土状態（西から）



埋裏⑤と205住居（北から）



埋裏⑤埋設状態（北から）



埋裏⑤底部状態（北から）



埋裏⑤底部穿孔（北から）



210住居炉 (北西から)



210住居炉断面 (南東から)



埋裏㊸出土状態 (西から)



埋裏㊸出土状態 (西から)



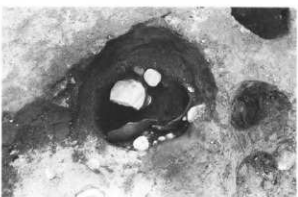
埋裏㊹出土状態 (西から)



埋裏㊹出土状態 (西から)



P11遺物出土状態 (南東から)



P48遺物出土状態 (南から)



集石2 (北から)



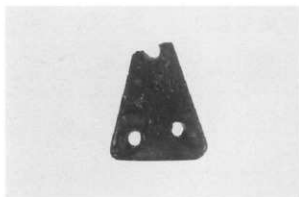
集石5 (西から)



土壇17 (北東から)



石 簇



垂飾り



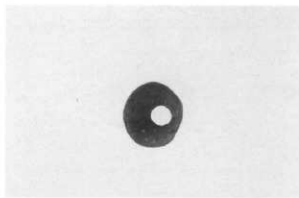
同 左



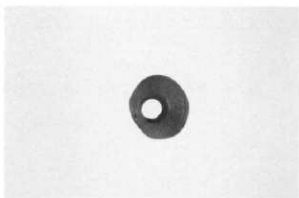
垂飾り



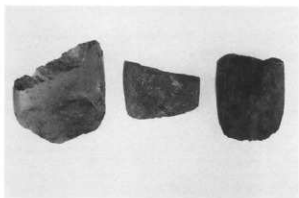
同 左



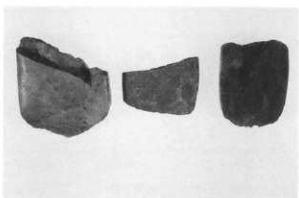
垂飾り



同 左



磨製石斧



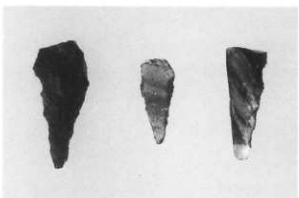
同 左



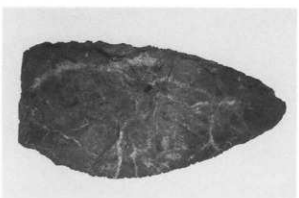
スクレイパー・打製石斧



石 槌



石 錘



石包丁

報告書抄録

ふりがな	ほうろくやしきいせき							
書名	ほうろく屋敷遺跡Ⅳ							
副書名	個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	明科町の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第11集							
著者名	大澤 哲 山本紀之							
編集機関	明科町教育委員会							
所在地	〒399-7102 長野県東筑摩郡明科町大字中川手6824-1 ☎ (0263) 62-3001							
発行年月日	2001年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうろく 屋敷	長野県東筑摩郡 明科町大字 南陸郷小泉	20241	101	36° 23' 52"	137° 55' 50"	2000.05.10 ? 2000.06.10	150㎡	個人住宅建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ほうろく屋 敷	集落址	縄文時代	竪穴住居14軒他	縄文土器 石器他		未製品の石器や剥片、細かな削り 屑、石器の原石が多量に出土する ことから石器製作を担う集落址で ある可能性が大きい。		

明科町の埋蔵文化財 第11集

ほうろく屋敷遺跡Ⅳ

—個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告—

平成13年3月25日 発行

編集・発行 明科町教育委員会  
長野県東筑摩郡明科町  
大字中川手6824-1

印刷 ほおずき書籍館  
長野市橋原2133-5

